

2025年8月10日聖霊降臨後第9主日説教

創世記15章1－6節

ヘブライ人への手紙第11章1－3、8－16節

ルカによる福音書第12章32－40節

本日の特祷は新しい試用版からです。「全能の父なる神よ、あなたの御心は愛する御子にあって、この世界を癒し、平和を実現することにあります。どうか国々の政治に責任を持つ人々の心を治め、罪の力によって分かれ争う世界が、正義といつくしみに満ちた神の支配にこそ従うことができますように」。この祈りの言葉は、今、わたしたちの住んでいる地域の歴史、そして、世界の各地で起きている争いを覚えるとき、まさにふさわしい言葉といえます。

特祷は新しくりましたが、聖書日課は、従来と同じです。もし三つの聖書日課共通の主題を選ぶとしたら、それは「信仰」です。

旧約日課は、創世記にあるアブラム（のちのアブラハムですが、まだアブラムなのでアブラムと表記します）のお話です。「これらのことの後、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。『恐れるな、アブラムよ。私はあなたの盾である。あなたの受ける報いは非常に大きい。』」（創15:1）とある通り、まだアブラハムと呼ばれていない時代に、「幻」の中で、主なる神様から祝福の約束を受けるお話です。7月の旧約日課で創世記18章から2回学びましたが、本日の箇所は少し前の部分です。「これらのこと」とあるのは、アブラムがロトと別れ、カナンの地に住むようになり、諸王たちの戦いがあり、サレムの王メルキゼデクがアブラムを祝福したことなどです。

主なる神様は、「幻の中でアブラムに臨んだ」とありますが、それは、「幻」という、実態があるかどうかは別として、見えるもので示したということです。主なる神様は、視覚的（幻）と聴覚的（言葉）の両方という、分かりやすい形を通してアブラムに意思を示されたのです。

しかし、アブラムは、その分かりやすい神様のご意思を素直に受け取れませんでした。「アブラムは言った。『主なる神よ。私に何をくださるというのですか。私には子どもがいませんのに。家の跡継ぎはダマスコのエリエゼルです。』」（創15:2）とある通りです。

すでに11章30節でサラがまだサライと呼ばれていた時に、二人には子どもがいなかったことが告げられていました。そのような状況であるにもかかわらず、主なる神様は、12章では「主はアブラムに言われた。『あなたは生まれた地と親族、父の家を離れ私が示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民とし、祝福しあなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福の基となる。』」と告げていました。そして、アブラムもその言葉に従い、カナンの地に向かい、その地でその地の王であり祭司であるメルキゼデクから祝福も行け、さらにここで、改めて分かりやすい形で神様の指示を受けたのですが、その指示を受け入れなかったのです。アブラムとサライとの間には、子どもがいなかったという現実があったからです。自分の前にある（おそらくもう80歳代という）現実を直視すると信じられないのです。理性的判断が、信仰を妨げたのです。

アブラムの理解は、「アブラムは言った。『主なる神よ。私に何をくださるというのですか。私には子どもがいませんのに。家の跡継ぎはダマスコのエリ

エゼルです。』」（創 15：3）という言葉から明確です。これは、アブラムが認識している現状の提示です。ことに、「私に何をくださるというのですか」という言葉は、このような現状を派生させた主なる神様の責任を問う、そんな訴えに近いものがあります。

主なる神様を信じ、カナンの地にまで来る「これらのこと」の歩みの後、現状を認識したアブラムの理性が、神様への信仰を打ち消しそうになるのです。しかし、神様は、そんなアブラムに対してさらに分かりやすく、「すると、主の言葉が彼に臨んだ。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなた自身から生まれる者が跡を継ぐ。』主はアブラムを外に連れ出して言われた。『天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』」（創 15:4-5）と語るのです。星という見えるものを通して語り掛け、約束が現実であることを告げるのです。

これらのお話にある「幻」と「星」は非常に象徴的です。実態はあるかどうかは別として見える「幻」、そして、その実態は見えているが決して人間が到達することのできない「星」、その二つの見えるものを通して、神様は、アブラムに約束を明示したからです。

アブラムは理性を超えて、改めて信仰を取り戻します。そのことを示す表現が、有名な「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」（創 15:6）です。「信じる」という言葉は、アーメンと語源が同じです。確信する、確実にする、固くするなどの意味があります。「義」という言葉は、法律的、裁判や判断の判決など理性的に正しいことを意味しています。アブラムが、人間の理性を超えて、主なる神様に対する思いを確実にし、そのアブラムの姿を、主なる神様はそこにご意思・基準から正しいと判断されたということです。

本日の三つの聖書日課の主題は「信仰」であると最初に述べましたが、このアブラムのお話は、まさにその本質を語っています。アブラムは、見ることで現実だけで判断するのではなく、たとえ今は見るができなかったとしても、主なる神様が示されるから事柄を信じた・信頼したということです。そのようなアブラムの姿からヘブル書は信仰について、「信仰とは、望んでいる事柄の実質であって、見えないものを確証するものです」（ヘブル 11:1）と、こちらにも有名な言葉で示します。この部分は新共同訳からかなり訳が変わりました。かつては「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」でした。現実をしっかりと認識することは大切ですが、そればかりにとらわれてしまうと、主なる神様の意思を受け入れることができなくなってしまうのです。しかし、特権に「この世界を癒し、平和を実現すること」とある通りに、何が求めるべき事柄かを確信する時、たといはつきりとした未来が見えなくても、希望は無くならないのです。

本日の福音書は、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカ 12：32）というイエス様の言葉から始まっていますが、その前には「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられる」（ルカ 12：31）があります。富についての教えの一部ですが、イエス様は、わたしたちが何を求めるべきかを示してくださっています。それは主なる神様の国です。支配です。それが、「この世界を癒し、平和を実現する」、そのことを信じて、これからも歩みたいと思います。